

# 環境会計は役に立っているのか？



**A** 外部から企業を評価するための環境会計は、まだ発展途上。だが、環境投資の効率を高める内部管理に生かしているケースも登場している。

企業の環境への取り組みに関するコストや効果を定量的に把握する仕組みが環境会計だ。2000年5月、環境省が「環境保全コストの把握及び公表に関するガイドライン」を公表（2002年3月改訂）して以来、これに基づいて環境会計に取り組む企業が増加している。今や環境パフォーマンスと並び、環境報告書に盛り込む情報の定番といってもよいほどだ。

「海外では、これほどの企業が環境会計のデータを開示している国は無い。環境省のガイドラインが果たした役割は大きい」と、環境会計に詳しい高崎経済大学の水口剛・助教授は指摘する。

しかし、このデータを活用しているのは、エコファンドのアナリストなど一部の専門家だけ。「何をどのように読み取ればよいかわからない」という読者は多いのではないだろうか。それは、会計自体の難しさに加え、環境会計のデータの表記や集計の方法がまちまちであることが、大きな原因の一つになっている。

コストや効果の分類項目は環境省

のガイドラインに沿っていても、それぞれの分類ごとの集計は、各企業の判断による部分が多い。しかも、効果をすべて金額換算したり、環境負荷の削減指標で示すなど、いくつかのパターンがある。

これでは、企業がどれだけ環境対策に力を入れ、どれだけ成果を上げているのかを評価することは難しい。複数の企業間でデータを比較することも不可能だ。

だが、このことだけで「環境会計は役に立たない」と断じてしまうのは早計のようである。

## 環境負荷とコストの両面から製造ラインを洗い直す

環境会計には、外部からの評価に役立てるための外部報告と、環境投資の効率を高めるための内部管理の2つがある。このうち、「外部報告はまだ発展途上で、環境省のガイドラインも見直しを進める必要がある。だが、内部管理では既に成果を上げている企業が出てきている」（高崎経済大学の水口助教授）。

富士通は2002年度から、資材やエネルギーの使用量など製造ラインにおける環境負荷を低減する「グリーンプロセス活動」に着手した。ただ、環境負荷を下げるといっても、企業にとってコストを抜きにして対策を打つわけにはいかない。このため、使用する各資材をコストと環境負荷の両面から評価する「コスト・グリーン(CG)」という指標を開発した。

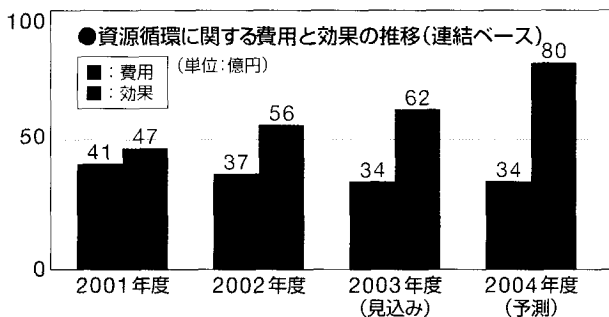
CG指標は、「単位製品当たりの資材の投入量」「単価」「環境影響度」の3つの数値をかけて計算する。環境影響度は5段階評価。例えば影響の小さい一般の資材は「1」、発ガン性など人体に大きな影響がある化学物質は「5」となる。この指標が大きい資材ほど、コストや環境負荷が大きいため、対策の効果も大きくなる。

グリーンプロセス活動では、各製造ラインが設定した目標通りに環境負荷を削減しているかを四半期ごとにチェックして、継続的に環境負荷削減を進めている。その際、CG指標の大きな資材から優先して、使用量を削減するなどの対策を打つわけだ。

「CG指標を使うと、これまでのムダがよく見える。われわれも驚くほどの効果だ」と、富士通の古賀剛志・環境本部長は強調する。

全社に先駆けて導入したのは、薬品やガスなどを大量に使う半導体製造拠点の三重工場。ここでは、2003年度第3四半期の実績を2002年度第4四半期と比較すると、単位製品当たりの薬品・ガスの使用量を45%、コストを24%それぞれ削減したという。現在、全社への展開を進めているところだ。

富士通だけでなく、日東電工や田辺製薬など内部管理のために環境会計を有効利用している企業のケースは他にもある。自社の工夫次第で、環境会計は確実に役立つ。



## 富士通グループは環境対策の費用対効果を高めている

富士通は、製造ラインに投入する資材をコストと環境負荷の両面から評価する独自の指標「コスト・グリーン(CG)」を開発。環境対策の効率化に活用している。資源循環の費用対効果は大幅に向上した